因幡における戦乱と城－尼子再興戦における因幡の城館－

大川　泰広

１　はじめに

鳥取県ではこれまでに約５００城（因幡：鳥取県東部で 297 城、伯耆：鳥取県中西部で 207 城）の城跡が確認されている（第１図）。

鳥取県内では平成10年から15年度にかけて、近世城郭を含めた県内に残る城館跡の分布調査を行い、その成果は『鳥取県中世城館分布調査報告書』因幡編、伯耆編として刊行されている（鳥取県教育委員会編 2004、2006）。この分布調査報告書では因幡で約 300 箇所、伯耆で約 200 箇所に及ぶ城館の分布や個別城館の様相について報告されているが、掲載できなかったものや、その後の発掘調査によって新たに確認された城館もあり、その数は現在でも少しずつ増加している[1)]。

因幡、伯耆は南北朝期以降、代々山名氏が守護を歴任してきた。特に応仁・文明の乱以降、一族内の争い等によって伯耆国は比較的早い段階に出雲の尼子氏の影響下におかれた。尼子氏による支配も永くは安定せず、尼子氏が安芸毛利氏により滅ぼされると、伯耆の支配は毛利氏に引き継がれた。因幡国内では奉公衆を中心とする山間部領主層による反守護の動きに加え尼子氏の力を背景とした因幡守護家と但馬宗家が反発と融和を繰り返す中で、因幡守護家の力が弱まり、結果、但馬守護家の一族が因幡を支配した。

その後、因幡は西から毛利氏、東から織田氏による大きな戦国大名勢力の境目となり、鳥取城攻めを代表する天正八年（1980）、同九年（1981）の毛利・織田戦争を迎える。

こうした時代を背景として県内に約 500 箇所の城館が構築されている。これらの城館のうち、文書史料などにより来歴や合戦との関りがみられる城館は決して多くはない。

ここでは因幡を舞台とした尼子再興戦の後半部をとりあげ、特に私部城など因幡山間部で行われた合戦、その合戦を通じて尼子、毛利そして在地領主の城にどのような特徴や要素が残されたのか確認する。

２　因幡における尼子再興戦の概要

永禄九年（1566）十一月に月山富田城が尼子義久の降伏により落城すると、山陰地域は広く毛利氏の支配下に置かれた。尼子再興戦の状況については、岡村吉彦氏、高橋正弘氏、山本浩樹氏等により詳しく述べられている（高橋 1986、岡村 2010、岡村 2022、山本 2021）。これらを元に因幡における尼子再興戦の概要を確認しておく。

富田城落城後、永禄十二年（1569）六月に毛利方による九州攻めの隙をついて山中鹿之助らをはじめとし、尼子氏は一族再興を図って、日本海を通じ出雲・伯耆へ侵攻した。尼子勢は但馬山名氏の援護を受けたものと考えられ、短期間のうちに西伯耆の末吉城など多くの城を攻略した。やがて北九州から伯耆の個人らが帰国し、尼子勢に対応している。因幡国内も私部毛利氏、矢部氏、丹比氏、伊田氏、用瀬氏といった山間領主層が反武田として尼子勢の動きに呼応しつつあった。元亀元年（1570）五月には岩井池谷での合戦、元亀二年（1571）四月には、それまで武田高信と行動していた矢田幸佐が鹿野荒神山城に立て籠り、山田重直らにより攻略される事件が起こるなど、因幡も不安定な情勢となっていた。その後、毛利方が伯耆国内への対応を強め、元亀二年（1571）七月には吉川元春が伯耆へ進軍し、劣勢となった尼子勢は、伯耆・出雲から退去した。

天正元年（1573）五月頃、突如、因幡の武田高信に起こった「不慮」により、因幡国内が混乱する中、

そして因幡に尼子勢が集結する事態が起こった。このとき、武田高信に起こった「不慮」は死去の可能性が高く、山名方や山間領主層など、尼子と結びついた勢力が関わった可能性が指摘されている（岡村 2022）。

同年六月には尼子勢が因幡へ侵攻し、但馬との国境に近く日本海に面した桐山城（鳥取県岩美町）を拠点として因幡国内へ勢力拡大を図ったとされる。同月上旬には因幡の山間部、八東郡と智頭郡を結ぶ小幡（小畑）城や姥ヶ城に対して武田の老中たちが攻撃を加え落城させている。私部毛利氏をはじめとする因幡の山間領主のうち、用瀬氏は毛利方となっていたようで八月には尼子勢が用瀬城下に攻め込み、伊田氏とともに尼子方に転じた。因幡への影響力を強める尼子勢に対して、毛利勢の対応は後手にまわり、援軍が遅れたことから、八月一日には鳥取城が尼子勢に攻められ、九月には鳥取城は山名豊国と山中幸盛の調略によって陥落した。

こうした因幡の情勢に対して、毛利方は「鹿野古城」の普請を命じ、野村士悦を城番として派遣するとともに、吉川元春をはじめ、桂元重、口羽道良、福原元俊らが因幡に赴いた。さらに元春自身は鹿野の普請のため出陣していることから、「鹿野古城」の整備は因幡における戦略上の拠点、「因伯仕切之城」として重要視していたことが窺える[2)]。加えて鹿野へは鉄砲衆も派遣されている。

毛利方は尼子方からの国人領主層の懐柔を図っており、十一月には用瀬氏、吉岡氏を引き入れることに成功している。こうして鳥取平野を南北に流れる主要河川千代川を挟み、東側に尼子勢、西側に毛利勢という構図をつくっていた。しかし、天正二年（1574）三月までには尼子方として鳥取城に在城していた山名豊国への懐柔を図り、尼子勢からの切り離しを成功させたことから、徐々に毛利方の勢いが強まる。鳥取城を失った山中幸盛ら尼子方は私部城（鳥取県八頭町）に拠点にすえ、国内の調略を進めた。尼子勢は桐山城、私部城を主な拠点としたのに対し、毛利勢は、鹿野城（鳥取市鹿野町）の普請、山名豊国の懐柔を進め、鵜尾城（鳥取市玉津）、徳吉城（鳥取市徳吉）に城番を派遣するなど、対応を進めている。

こうした毛利方の攻勢は徐々に私部城に籠る尼子勢に集中し、天正二年（1574）十一月には毛利勢が山下や館にまで攻撃を加えたが、攻略には至らなかった。

その後、尼子勢とその支援を担う但馬山名氏のつながりを断つべく毛利氏は調略を進めた結果、天正三年（1575）三月には対立関係にあった毛利氏と但馬山名氏との間で「芸但和睦」が結ばれると尼子勢は補給路、退路を断たれ、劣勢となる。同年九月には吉川元春が私部城を攻め、同月十四日には私部城の二の丸・三の丸まで攻撃を加えている[3)]。この攻撃により私部城はすぐに攻略されなかったが、十月中旬までに落城したようである。毛利方は続けて若桜鬼ヶ城（鳥取県若桜町）に攻撃を加えたものの城は落ちず、相城を設けて帰陣した。この相城が功を奏したのか、その後、天正四年（1576）五月頃までに尼子勝久・山中幸盛らが若桜鬼ヶ城を退去し、因幡における尼子再興戦は終結を迎えた（第１表）。

第１表　因幡における尼子再興戦

和年号	西　暦	日　付	城　名	記載内容	典　拠	
永禄十二	1569	11月下旬		去年十一月下旬毛利信濃守・矢部父子・丹比・井田・用瀬以下、雲州致同意、雖企逆乱候、	新県史下861	真継家文書
元亀元	1570	5月21日		去廿一日、於岩井池谷合戦之時、	新県史下865	「譜録」あ51秋里
元亀二	1571	5月14日	荒神山	殊荒神山之内計略之子細候つる、我本丸ニ火を懸、焼崩候て、即時ニ落去之由候、矢田事被討洩候て無曲之由、	新県史下900	山田家古文書　二
天正元	1573	5月		一　因州武田事不慮ニ被相果之由候間、彼国不可有正躰之条、伯州之可為破候、左候へハ雲伯諸牢人可相集之条其国之御弓矢ニ可罷成候、	新県史下961	「閥閲録」115　湯原文左衛門
		6月	小幡（小畑）姥城	至因州表諸牢人令乱入、所々城取付候之処二、武田方老中成動、小幡姥城被切崩、敵数輩被討捕之由、	新県史下963	山田家文書
		6月		一、我等事去六月ニ至因幡罷渡、幸盛得扶持候て在居仕候、	新県史下966	米井家文書
		8月1日	鳥取城	去一日於鳥取城下敵被討捕候、	新県史下965	「閥閲録」120　中井惣左衛門
		8月19日	用瀬城	去八月十九日於用瀬城下及合戦、	新県史下973	「閥閲録」120　中井惣左衛門
		9月	鳥取・岩井	因州表之儀、伊田・用瀬敵心之事有、爰鳥取・岩井をハ堅固二持抜、爰元へ茂注進候、左候共、鳥取・岩井をハ堅固に持抜、	新県史下969	久芳家文書
		9月	鳥取	誠鳥執之儀、此方加勢遅々付而、一着不能是非候、御方之儀、彼表御気遣御心労之処、彼家中別心之故、不被相叶候段尤候、無何事御下、先以可然候、	新県史下971	久芳家文書
		9月	鹿野古城	因伯仕切之城、鹿野古城可取付候と申事候	新県史下970	野村家文書
		11月		因州表之儀、用瀬・吉岡令一味太利之儀候間、可心安候、	新県史下981	三郷古文書纂（安芸）米山寺文書
天正二	1574	3月	私部	豊国此方令入眼、外聞可然帰陣候、誠大慶此事候、然ハ山鹿事、私部表在身	新県史下992	「吉川家中幷寺社文書」五
		9月21日	（鳥取城）	去廿一日至当城山下敵相動候、頓被懸合、		
		10月28日	私部	去廿八日、至私部館取懸候刻、諸卒及敗北之処、以一分被仕返、	新県史下1002	集古文書　一三
			私部	去廿八日、其許各被申談、至私部被相動、彼城下悉焼崩、	新県史下1003	山田家古文書　二
			私部	去拾月廿八日、私部表相動、山下館悉焼崩、則及合戦	新県史下1004	集古文書　一三
天正三	1575	正月～3月		御状拝披候、仍今度芸但和睦儀、豊国・垣屋駿河守以取曖相調、	新県史下1008ほか	吉川家文書ほか
		2月	喜為山（桐山）・私部	元春近日至因州表可有御出張由、先可然候、左候者、喜為山・私部之儀、頓如本意可被仰付候、	新県史下1022	吉川家文書
		3月	徳吉・鵜尾	徳吉・鵜尾之儀、	新県史下1032	山田家文書
		4月	鳥執・鵜尾	鳥執・鵜尾之儀堅固之肝要候、	新県史下1033	野村家文書
		5月	鳥取・鵜尾・吉岡・鹿野・徳吉・私部	自私部種々行を仕候、又自此方加勢之儀はきり々々共無候之条、既岩井なと之儀茂敵同意候、鳥取・鵜尾・吉岡まてニ候、鹿野・徳吉之儀ハ此方番衆被相拘候、（略） 因州之儀一行仕、私部仕崩候事こそ不成候共、稲薙申付相城取付、私部を押候て一味中兵粮被取込候ハゝ、私部之儀ハ相詰候ハて叶間敷候、兵粮等敵方にも無之由候、此方一味中も兵粮無御座候へ共、	新県史下1036	末永文書
		5月	徳吉、鵜尾	打続徳吉為験使在番之儀申候処、（略）今度鵜尾へ之儀申候処、是又被請付候段大慶無申計候、	新県史下1037	山田家文書
		7月	尾高、八橋	去八日至尾高陣易候、明後日十三八橋罷上候、	新県史下1047	山田家文書
		7月	長瀬	此表明日廿日長瀬陣替候、		
		8月	男山、丹比	其許男山罷■、殊大甚此表被越候間、在番候事辛労候、古志玄番允・大甚差遣候条、普請堅固ニ気遣肝要候、其方両人事二番ニ仕候て、鉄砲人数二ニ分一番宛、男山ニ可在番候、さ候て丹比ニ半分可罷居候、	新県史下1051	岡本文書
		8月29日	鬼城	天正三年八月廿九日尼子居城鬼城於山下及合戦	新県史下1058	「閥閲録」34　草刈太郎左衛門
		9月	私部	私部二三之丸迄仕取之由候、はや可為一途候、	新県史下1056	吉見家文書
		10月	私部	今度私部要害事、諸口依被取詰之、頓退散、	新県史下1064	吉川家文書
		10月	鬼城	将又因州表之事、鬼城ニ相城執付、元春此比至中途被打入候、	新県史下1070	「閥閲録」55　国司与一右衛門
天正四年	1576	5月	鬼城	随而鬼城事、雖被残置候、相城等数多以被付之故、頓退散候、	新県史下1086	吉川家文書

『新鳥取県史　資料編　古代中世１　古文書編下』（鳥取県2015）掲載史料　番号は掲載番号

３　尼子再興戦に関連する因幡の城館

（１）小畑城・姥ヶ城（第２～４図）

小畑城は八東谷に面し、東集落の背後に聳える独立峰状となった丘陵先端部にある。曲輪群は L 字形に屈曲した丘陵端に築かれている。山頂の主郭を中心として階段状に曲輪が連なる。曲輪Ⅰ（主郭）東側は一段低い鞍部で前後に配された三条の堀切を設ける。曲輪群東側の谷部には堀切から延びる竪堀 A から、谷地形に沿って北側にかけて連続する竪堀群が配置されている。谷部の麓にあたる B 周辺は後世の改変も考慮する必要があるものの、土塁を伴って横堀状となっている。小畑城はコンパクトながら東側谷部を中心に竪堀、横堀を入念に設けた構造が特徴的である。

姥ヶ城は小畑城から南に約 2.8 ㎞に位置する尾根の頂部（標高 510m、比高 250m）に築かれている。主尾根は南北方向に延び、頂部は三方に延びる枝尾根に沿って曲輪を配置する。各曲輪の表面は起伏が残り、整形は不十分な印象が強い。一方で北端の曲輪は北面の切岸が約１０ｍの高さとなっており、北側からの攻撃に備えた構造に特化したものと考えられる。

小畑城、姥ヶ城の城主は在地領主、小畑氏を城主とする伝承が残されている。また、姥ヶ城の東西両側の谷部は、八東谷から若桜鬼ヶ城のある三倉方面や峠を越えて八東郡と智頭郡を繋ぐルートとなっており、小畑城は谷筋の出入り口を姥ヶ城は谷全体を見渡す位置にあり、両城の位置は交通の要衝となる。

武田の老中たちと抗争した相手方は尼子方となった小畑氏か尼子勢の本体かは不明だが、立地的にも対応を迫られる状況であった。

（２）私部城（第２・５・６図）

天正二年（1574）三月から落城までの約 1 年半、尼子勢が拠点とした私部城は標高 276m（比高 200m）の「城山」にあり、城域は南北約 400m、東西約 500ｍと広大な範囲に及ぶ。南東－北西方向に延びる痩せ尾根を中心とし、頂部の曲輪Ⅰ（主郭）、中腹の曲輪Ⅱ、曲輪Ⅲのある主尾根を中心に、尾根上に曲輪（平坦面）を階段状に連ねる構造を基本としている。確認できる平坦面（曲輪）は約 130 ヶ所を数え、主に北側に展開する枝尾根上に築かれた曲輪は曲輪群の下端は山裾まで到達しており、単体としてみると小さいものでは幅約１ｍを測り、曲輪の前後に見られる切岸は高低差が比較的大きい。遮断施設として曲輪Ⅰの背後に三条の堀切、北麓の尾根先端付近に竪堀を配置する。また主郭の北東側に延びる枝尾根上に曲輪面の東側を土塁とした箇所がみられる。

文書史料に見られる私部城の施設として山下に「館」、城内に「二の丸」、「三の丸」と呼ばれる曲輪が存在したことが窺える（第１表）。地元では曲輪Ⅱを「馬場ヶ平」、曲輪Ⅲは「玄蕃ヶ平」と伝えており、吉田淺雄氏は曲輪Ⅲを史料上の「三の丸」に比定している（吉田 1985）。

城の創築年代は不明ながら私部毛利氏（15 世紀後半）以来、天正九年（1581）頃まで、現在の姿になるまで改修、整備が繰り返されたものと考えられる。私部城に特徴的な尾根上から山麓まで曲輪を連続する構造（「階段状削平段」）は、数少なく因幡の国人領主の城としては鵜尾城（第７図）が比較的近しい特徴をもつ[5)]。尼子勢が拠点とした桐山城（岩美町）、若桜鬼ヶ城（若桜町：第８図）には山麓まで小規模な曲輪を連続させた様相は認められない。尼子勢が立てこもった期間でどの程度改修が行われたかは明らかにできないが、私部毛利氏以来、安芸毛利氏、後に私部城を攻略した織田勢による改修によって曲輪群が追加されたものと考えられる。改修主体の検証は困難だが、私部城の備えとしては急峻な尾根上を利用して階段状に曲輪を連続的に配置する指向性がうかがえる。

（３）上津黒城（第２・７図）

上津黒城は私部城の西側に延びる丘陵上に築かれた城で、南北に延びる尾根上のピークに位置する曲輪Ⅰ～Ⅲの周囲に小規模な曲輪を配置している。曲輪平坦面の加工は丁寧ではない。曲輪ⅠとⅡの間、曲輪ⅡとⅢの間は通路状となっていたようで、堀切は曲輪Ⅰの南側に一条（A）、曲輪ⅠとⅡの間に二条（B）の二ヶ所に設けられているが、堀切 B は浅く尾根上は自然地形のままである。曲輪ⅠやⅡから東側に延びる枝尾根や曲輪Ⅲの北側に階段状に曲輪群を連ねる形状や、曲輪Ⅰの南面に二段の帯郭を巡らせ、西側以外の三方に対する防御を意識していると思われる。さらに上津黒城に、西隣する尾根上にも平坦面が存在している可能性があり、丘陵上が陣として利用された可能性もある。

また、毛利方による陣城の存在は明らかとなっておらず、私部城にこもる尼子勢に対して、毛利勢による天正三年（1575）９月の攻撃内容を伝える史料は少ない。『陰徳太平記』等によると、このとき私部城攻略のため城の周辺に毛利勢が詰め寄る状況[5]から、毛利勢は包囲戦を行った可能性がある。私部城周辺の尾根上には、城跡が密に分布（第４図）しているため、その中の一部は毛利勢による陣城であった可能性がある。私部城の南に聳える石仏山（標高 519m）には吉田氏により「私部城の出城」、「市場城広報の外郭的構」と評価された石仏山城があり、私部城を見下ろす場所にある（吉田 1985）。城跡は南北１km 以上に及ぶ尾根上に段差の小さな曲輪を連続させており、防御施設として明確な堀切や竪堀は少ない。

（４）鵜尾城跡（第２・８図）

鵜尾城跡は千代川下流域の西岸、鳥取市玉津集落の南西に聳える独立峰状の山頂（標高 268m（比高 240m）に築かれた山城である。南西―北東方向に延びる尾根の最高所に築かれた曲輪Ⅰ（主郭）、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴを中心とする曲輪群 A とその北東部に延びる枝尾根に築かれた曲輪群 B からなる。主尾根にあたる曲輪群 A は長さ約 200m、幅約 20mの範囲にやせ尾根地形を大きく削り込んで曲輪を連ねたもので、曲輪Ⅰからの眺望は眼下に鳥取平野を収め、北西に鳥取城のある久松山を一望できる。城域の遮断施設として曲輪Ⅰの後背に延びる二本の枝尾根上に各二条の堀切を備える。曲輪Ⅰから曲輪Ⅳの東側には、腰曲輪や犬走状に小段が巡り、堀切に接続する。曲輪群 A の各曲輪は痩せ尾根地形を削り出して平坦面を確保したもので、地形、地質による制約がありながら、曲輪と切岸を基本とする在地の国人領主層による山城の構造と特徴は類似する。

北東の枝尾根上に築かれた曲輪群 B は曲輪Ⅲの東側尾根で十五ヶ所、曲輪Ⅳの北東から東の斜面にかけて二十六ヶ所の小曲輪群からなる。これらは曲輪群 A とは異なり、階段状に幅の狭い曲輪を連続させている。この曲輪群は前述したように江戸時代の『因伯古城跡図志』にも描かれた。曲輪群 B が構築された斜面は山体の岩の風化した礫片が地表面を覆っており、植林や耕作の影響は考えにくい。城番として派遣された毛利方の城番には防御を固めるよう指示されているため、小曲輪群は、東側の谷からの攻撃に備えた状況が窺える。毛利方によって改修された可能性が考えられる。

（５）男山城（第２・９・１０図）

次に、毛利氏による在番、普請について文書史料が残る男山城を確認しておきたい。

天正二年（1574）八月、毛利勢は尼子勢の籠る若桜鬼ヶ城に対して北約 2km にある男山城に在番を置き、普請を命じた。『因幡誌』によれば男山城は国人古海某の居城と伝えられ、赤松川、角谷川に挟まれた標高 390m（比高 190m）に位置する。城跡は山頂の詰めの城となる曲輪群 A と山麓の屋敷地 B に分かれる。曲輪群 A は頂部にあって主郭に相当する曲輪Ⅰを中心として背後に堀切ⓐを設ける。山林

に覆われており、現在若桜鬼ヶ城への視通は確認できないが、前方の山塊を越して視認可能であったと考えられる。堀切の削平は明瞭であるが、曲輪Ｉの周囲やさらに南側に延びる尾根上の曲輪については削平が不十分である（高橋 2000）。

男山城の主要部となる曲輪群Ａは周囲の削平状態が悪く、切岸の高低差も低い。

前述の私部城、鵜尾城で確認した階段状削平段とは異なる方法により、毛利勢が陣城に改修した可能がある。立地から若桜鬼ヶ城に対する見張りなどの機能を担うために構築された陣と考えられる。

４　まとめ

以上、尼子再興軍にかかる城館として小畑城、姥ヶ城、尼子勢が拠点とした私部城、毛利勢により城番が置かれた鵜尾城、毛利勢による普請の記録が残る男山城について城の構造や周囲の状況を確認してきた。

小畑城、姥ヶ城は尼子勢による因幡侵攻の初期段階にあって、尼子再興軍による改修、整備が行われた可能性は低い。私部城については小規模な曲輪を山麓まで連続させる構造が改修、整備によって追加された可能性が考えられ、鵜尾城にも同様の構造が見られた。私部城、鵜尾城ともに有力な国人層が居城とした地域の拠点的な城館である。私部城は発掘調査等が行われていないが、尾根や斜面に連続する階段状の曲輪群を設ける指向性は毛利方により城番が配置された鵜尾城にも、同様に階段状に連続する曲輪群（「階段状削平段」）が備えられているため、拠点城郭に対する改修例の一つとして、毛利方が整備した可能性が高いと考える。

また、男山城は文書史料から、若桜鬼ヶ城にこもる尼子勢に対して男山城に城番を配置し普請が支持されている。元は在地の国人領主の城であるが、尼子再興戦に際して曲輪、切岸によっていた城を陣城に改修した可能性が考えられる。整備の状況としては「階段状削平段」によらない手法で、類似した遺構としては、上津黒城が類似する。尼子勢に対する対応として毛利方は城の改修、整備を進めていることが窺える。

それでは、尼子再興軍による改修や陣城の構築はどこまで行われたと考えられるだろうか。以上の状況からすると、因幡侵攻の初期から拠点とした桐山城（第１０図）では尼子再興軍が拠点として手を加えた痕跡が乏しい。後の天正８、９年以降に織田方が拠点として改修された可能性があるため、鳥取城や若桜鬼ヶ城における改修状況ははっきりとわからないが、若桜鬼ヶ城や陣城の構築や拠点となる城の改修をほとんど行っていない可能性が高いのではないだろうか。

註

１　令和７年４月からＣＳ立体図が公開されており、CS 立体図などを御覧いただくと、県内には既知の城跡以外にも尾根上を分断する溝状の堀切や、山林にひっそりと築かれた曲輪などの平坦面を随所に発見することが可能となっている。おそらく今後発見されるであろう城の数を考えると鳥取県内に築かれた城跡は５００をゆうに越えるものと考えられる。

２　「鹿野古城」については、現鹿野城と推定する高橋氏の説のほか、鹿野町鷲峰に所在する狗尸那城であった可能性も推定した（鳥取県埋蔵文化財センター2022）。

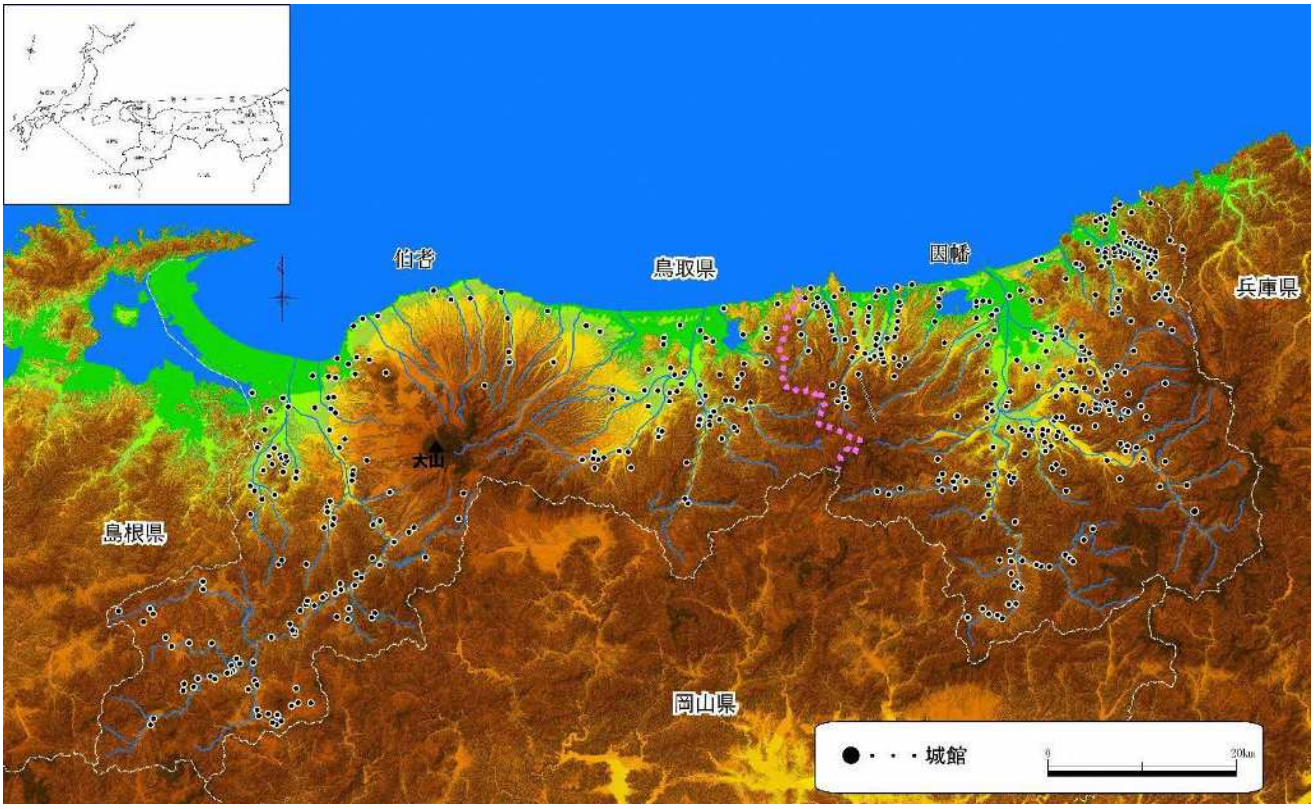
３　小早川隆景の参戦については、現地に赴いたとする説（山本 2022）や、実現しなかったとする説（高橋 1986）がある。

４文政元年（1818）頃に成立した鳥取藩内に残る古城を描いた『因伯古城跡図志』には私部城、鵜尾城ともに枝尾根上に小規模な曲輪を重ねた構造が描かれている。

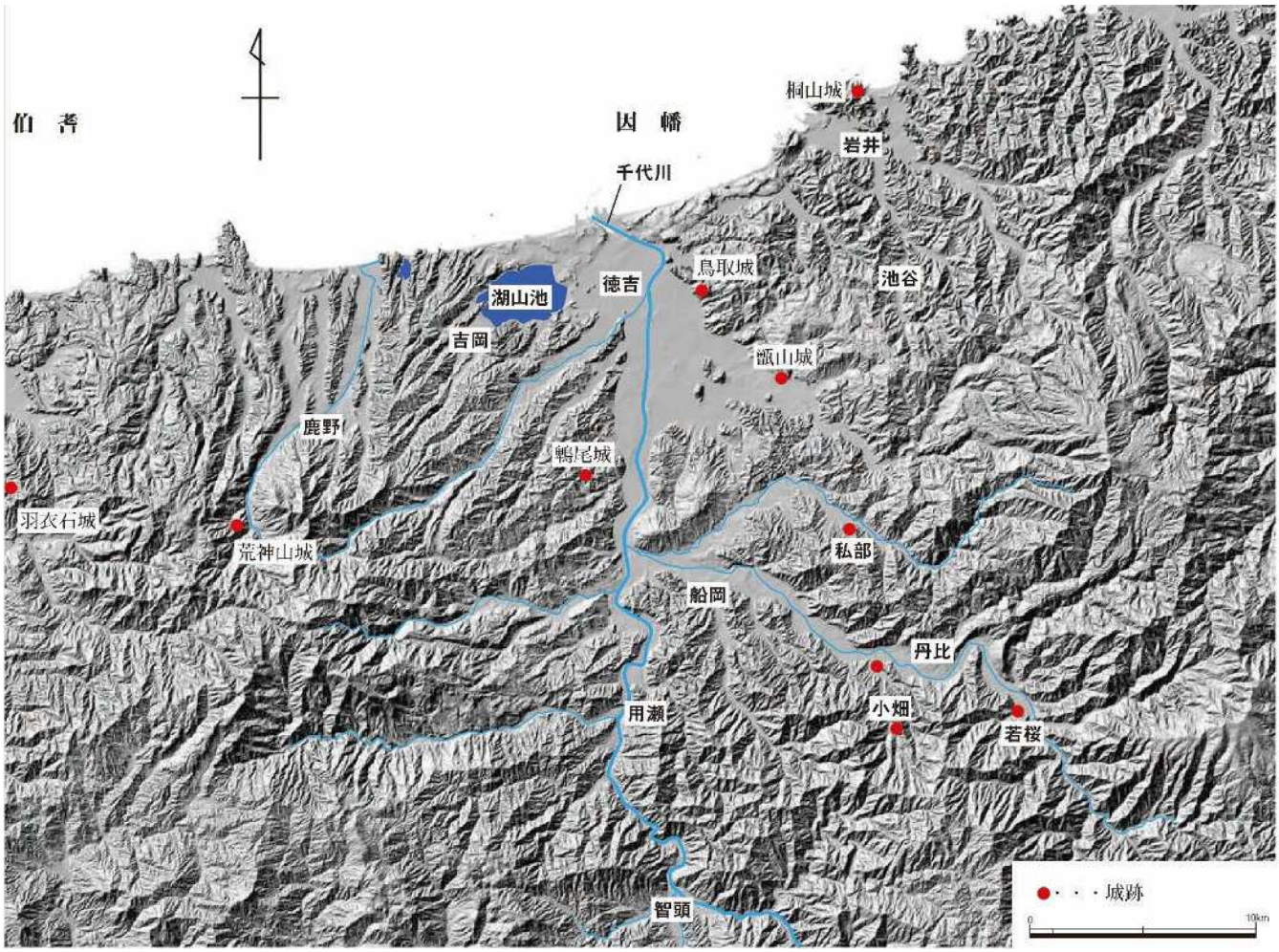
５　検証が必要となるが『陰徳太平記』巻第五十一によれば、吉川元春、小早川隆景が鳥取で合流し、「両将私部の城へ押し寄せ、仕寄りを付寄せゝ、井楼を組み上げゝ攻め近付き、透まを置かず攻められたり、」とあり、包囲戦を行った私部城への攻撃は包囲戦であった可能性がある。

引用・参考文献

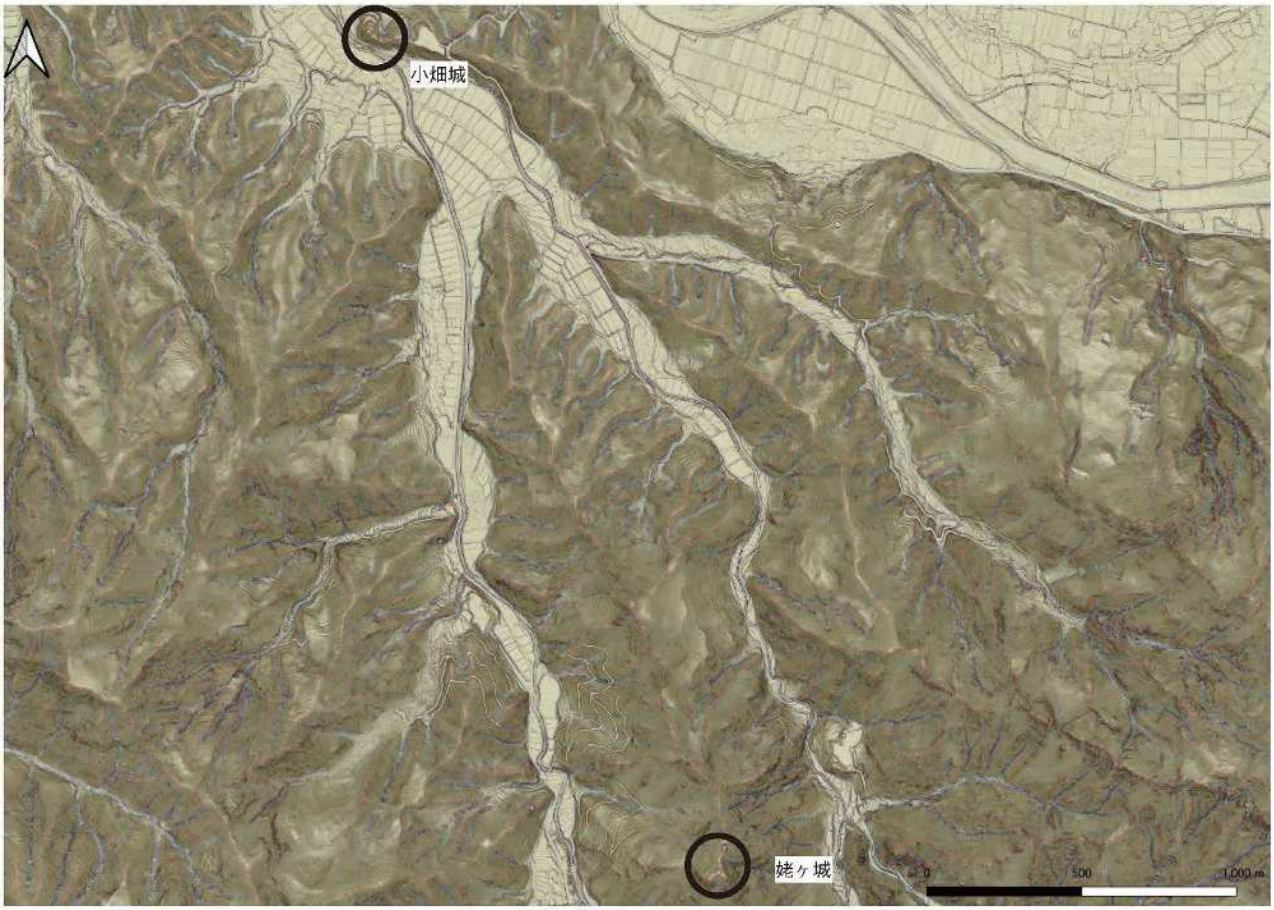
安部恭庵『因幡誌』
『陰徳太平記』
鳥取県埋蔵文化財センター2022『狗尸那城跡－鳥取県中世城館再調査事業Ⅰ－』鳥取県埋蔵文化財センター
岡村吉彦 2007『織田ｖｓ毛利－鳥取を巡る攻防－　鳥取県史ブックレット１』鳥取県
岡村吉彦 2010『尼子氏と戦国時代の鳥取　鳥取県史ブックレット４』鳥取県
岡村吉彦 2022「第二章　因幡国の戦国争乱と鳥取城」『鳥取城』ハーベスト出版
高橋成計 2000「若桜鬼ヶ城に対する付城の疑問点」『因幡若桜鬼ヶ城』城郭談話会
高橋成計 2024『毛利・織田戦争と城郭』ハーベスト出版
高橋正弘 1986『因伯の戦国城郭－通史編－』
東郷郷土誌編纂委員会編 1972『東郷郷土誌』
鳥取県教育委員会編 2002『鳥取県中世城館分布調査報告書　第１集　（因幡編）』
鳥取県教育委員会編 2004『鳥取県中世城館分布調査報告書　第２集　（伯耆編）』
鳥取県立公文書館　県史編さん室編 2015『新鳥取県史　資料編　古代中世１　古文書編下』鳥取県
徳永職男編『稲場民談記』
山本浩樹 2021「因幡・伯耆の戦国争乱と境目の民衆」『とっとりの乱世　因幡・伯耆からみた戦国時代』鳥取県立博物館
吉田淺雄 1985『因幡國私部　市場城誌』自費出版



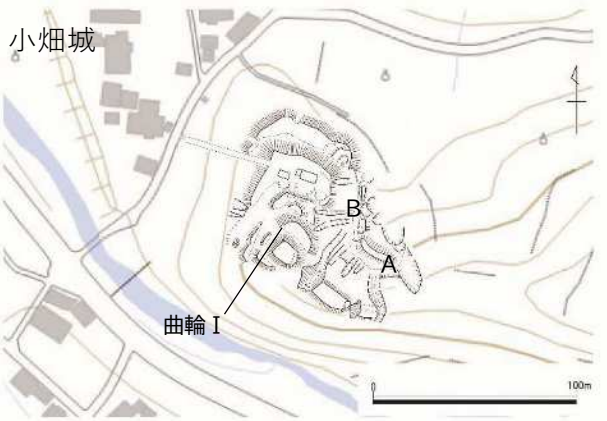
第１図　城跡位置図（鳥取県）

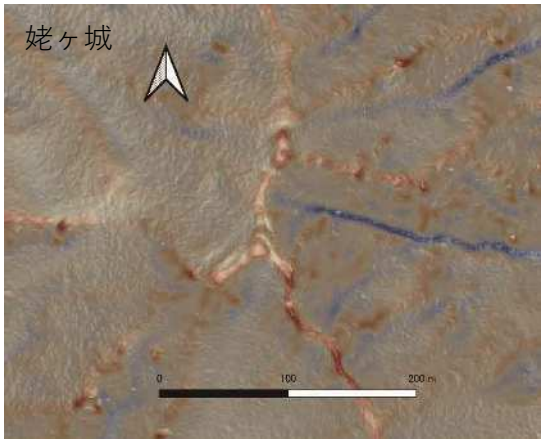


第２図　因幡における尼子再興戦関係位置図

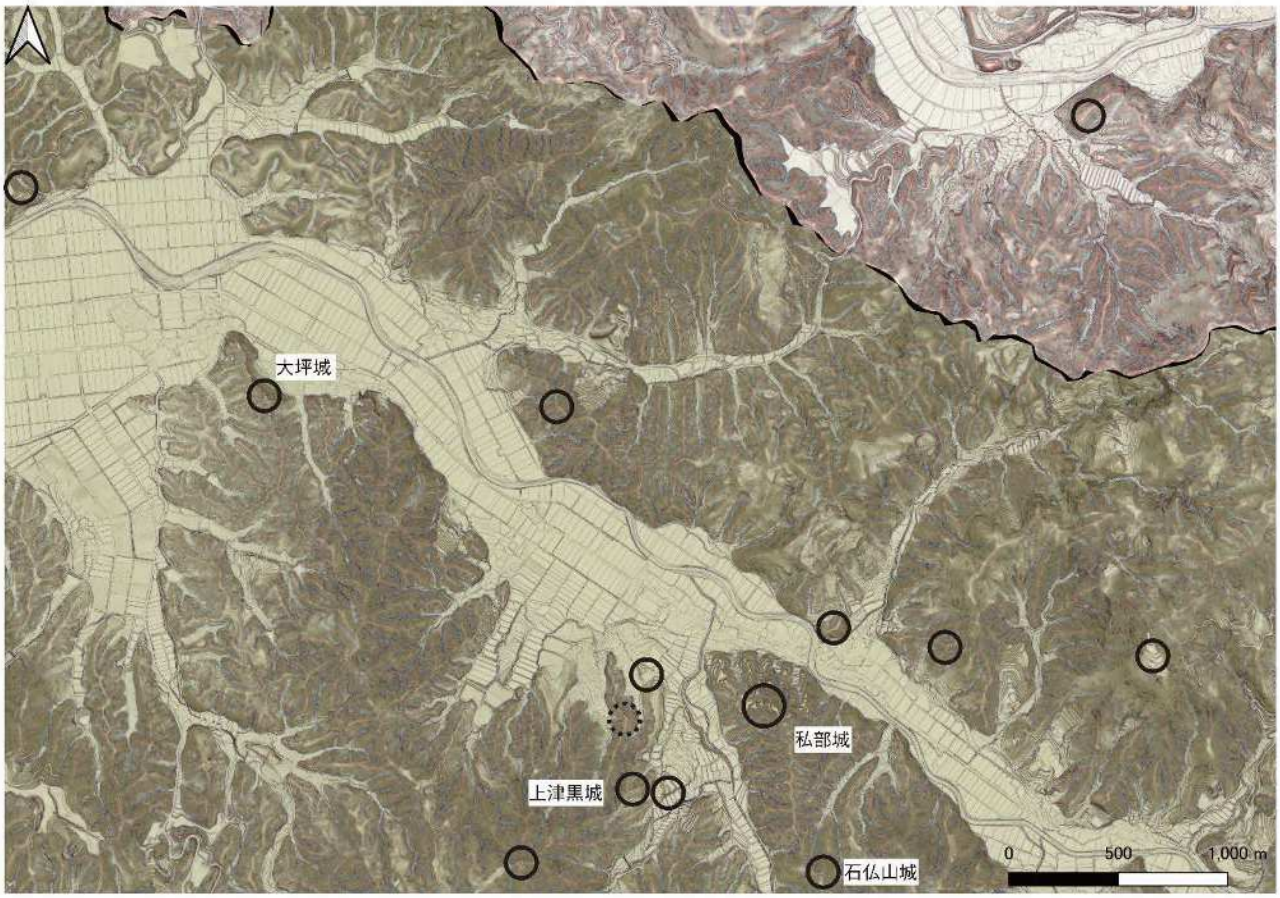


第 3 図　小畑周辺 CS 立体図

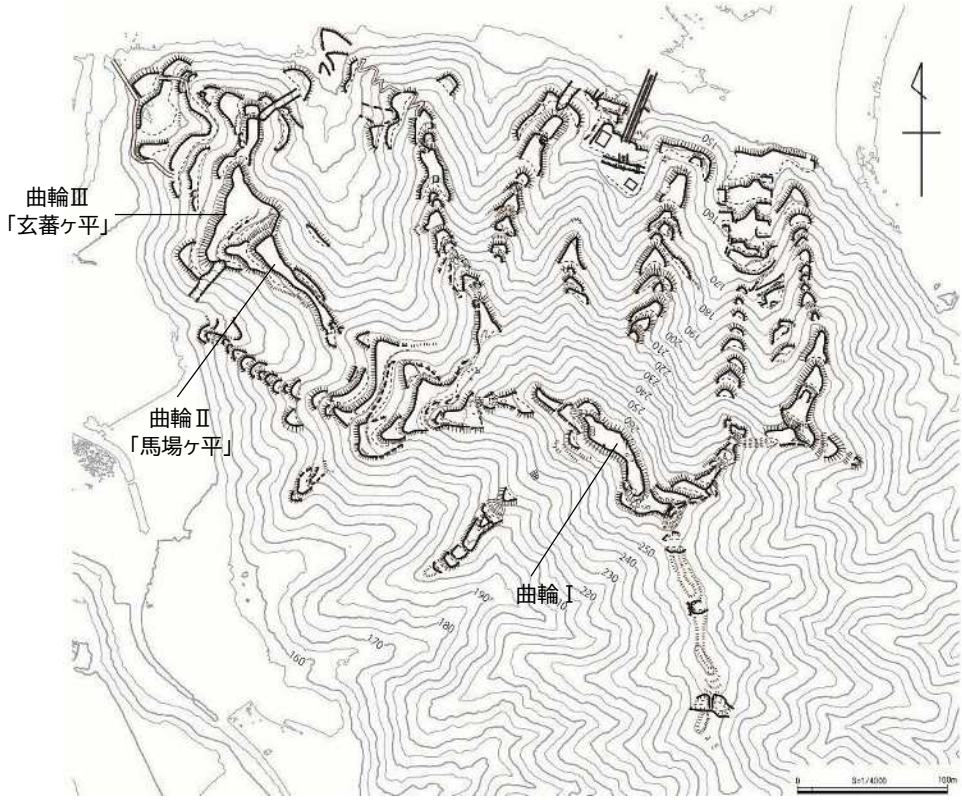




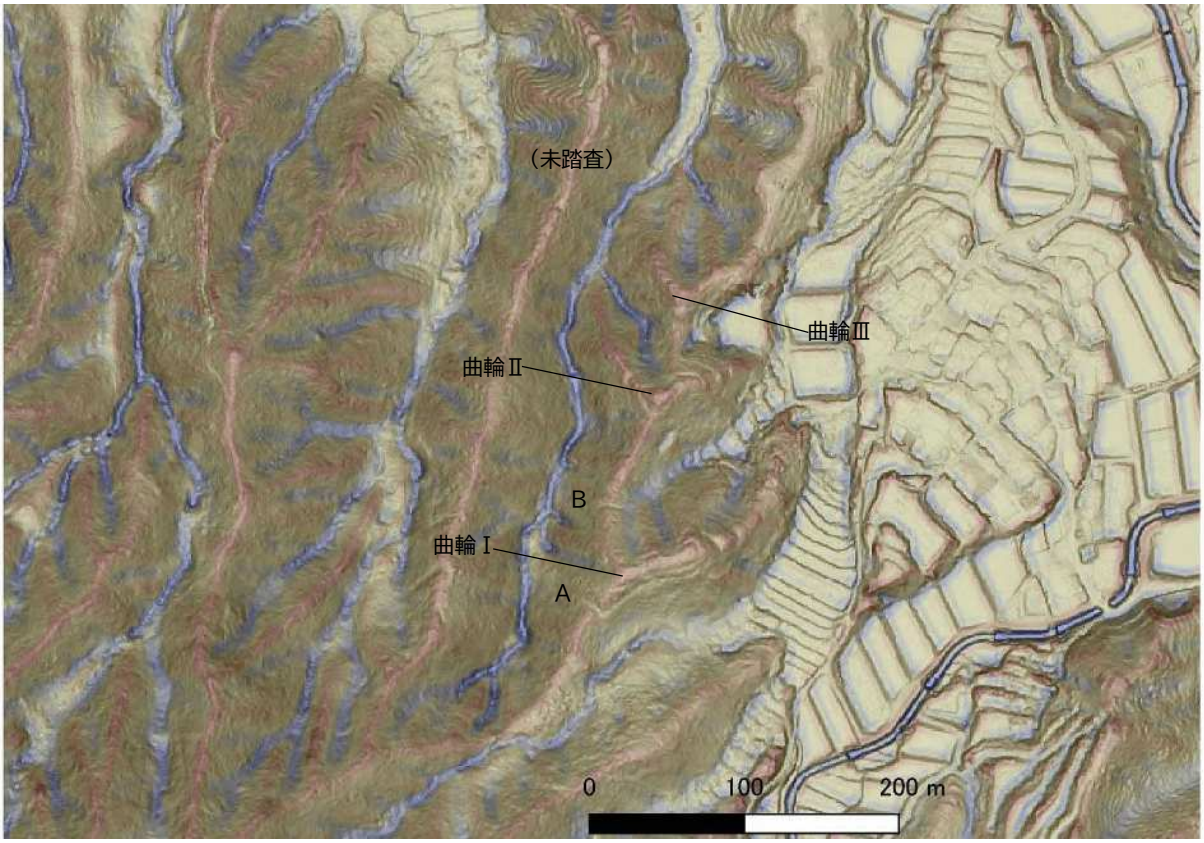
第 4 図　小畑城概要図・姥ヶ城 CS 立体図



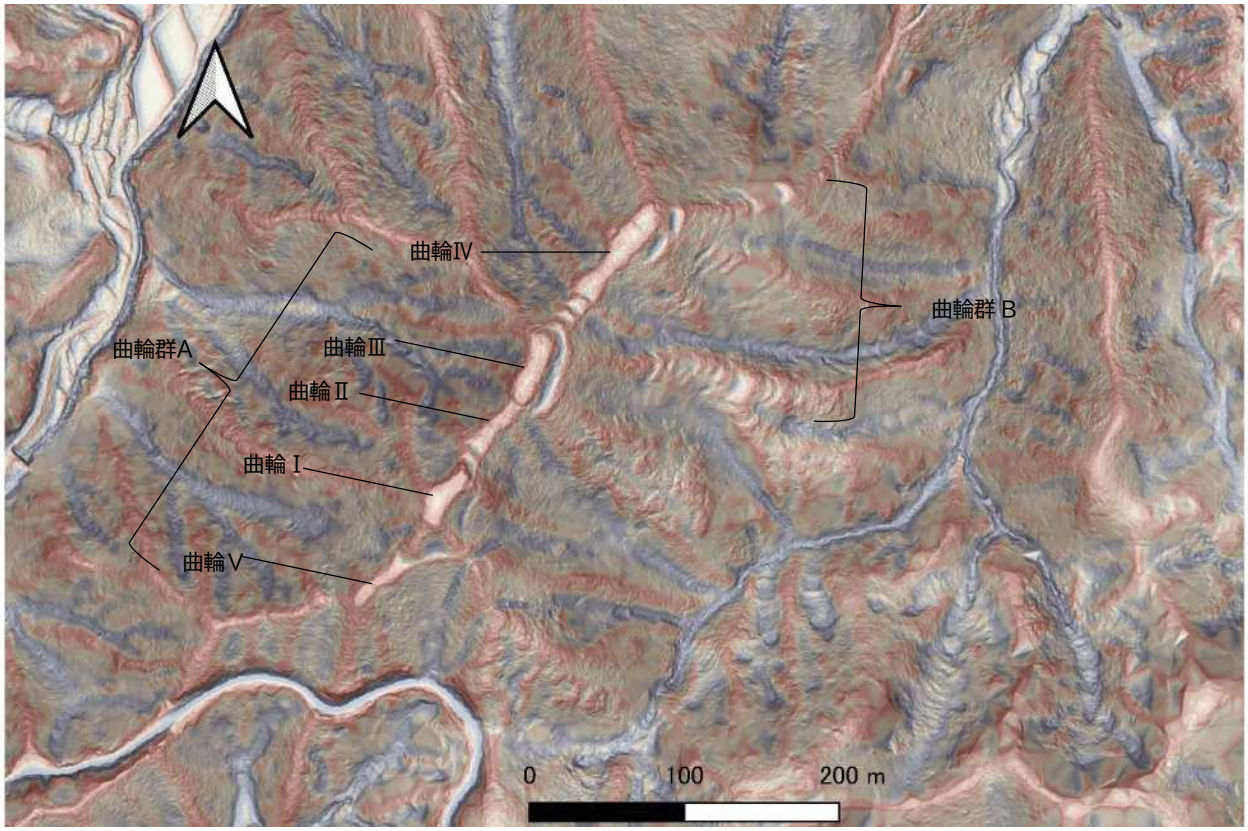
第 5 図　私部城周辺 CS 立体図



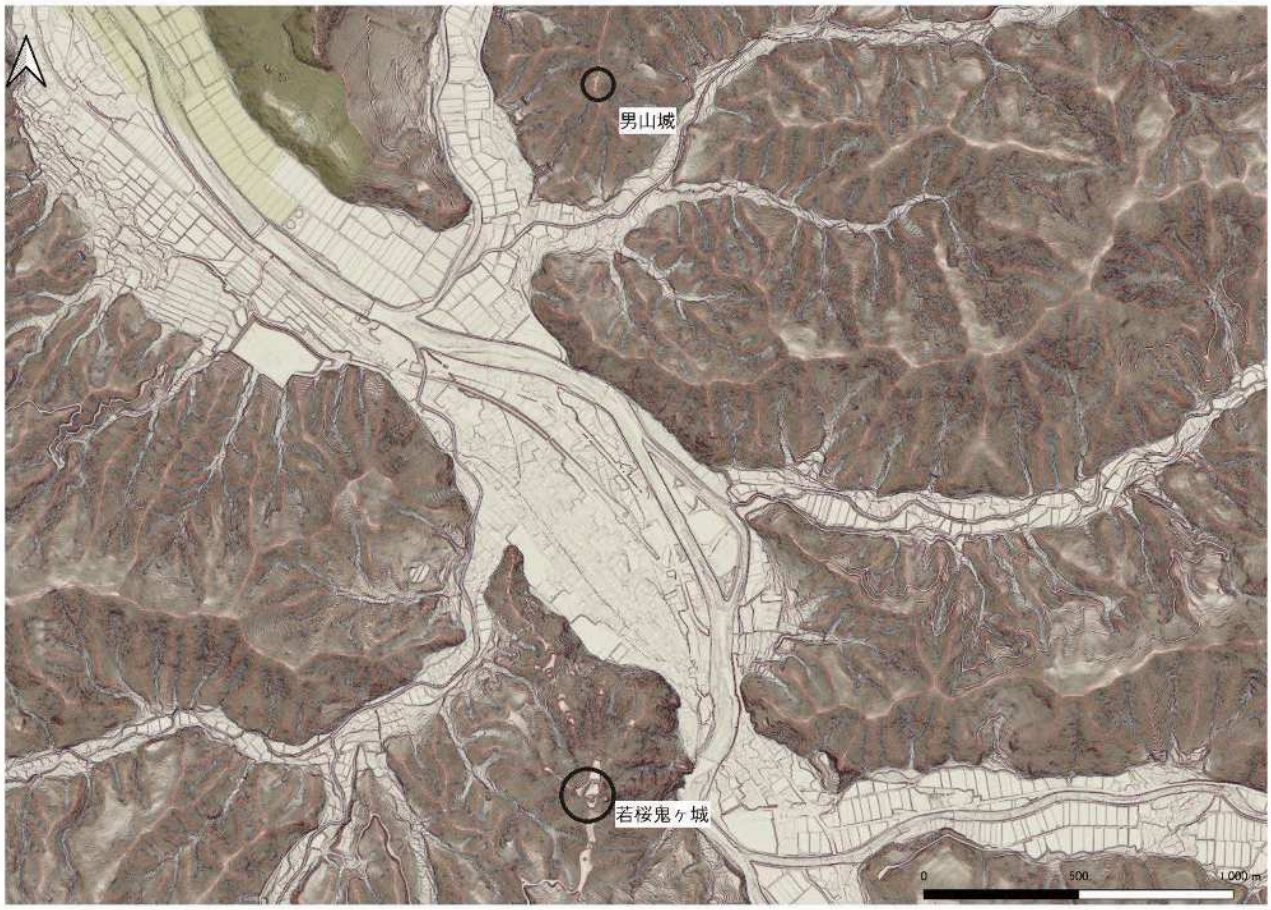
第 6 図　私部城概要図



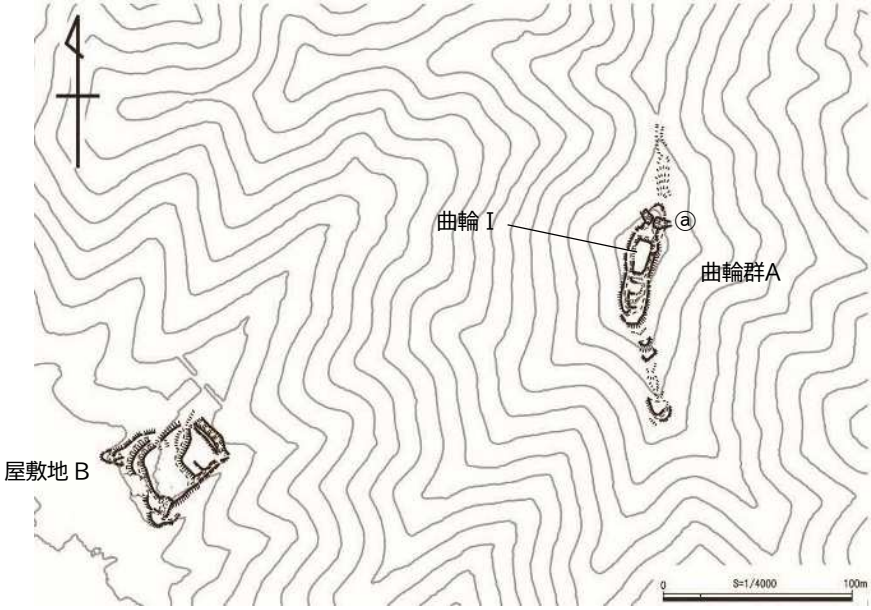
第７図　上津黒城周辺 CS 立体図



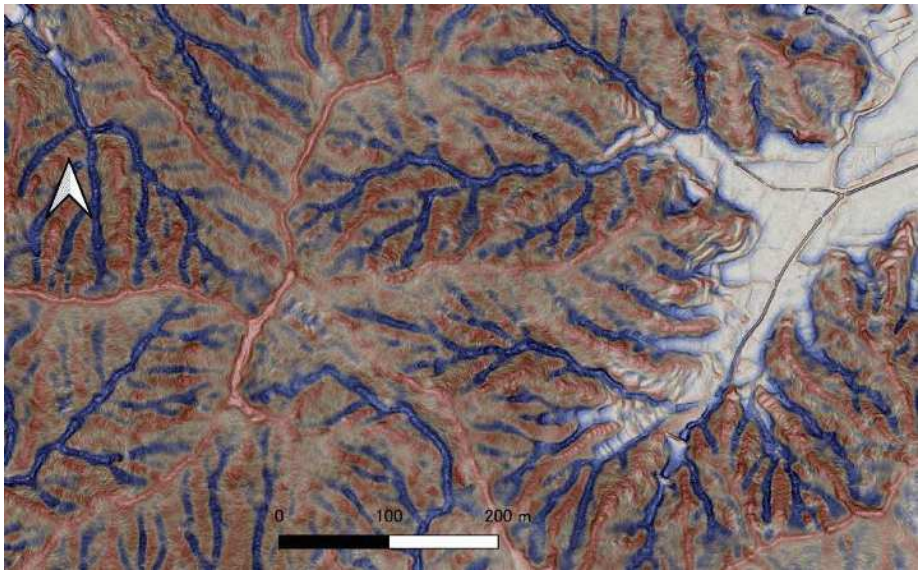
第８図　鵜尾城 CS 立体図



第 9 図　若桜周辺 CS 立体図



第 10 図　男山城概要図



第 11 図　桐山城